

第18回新生匠瑳戦略会議 会議録

開催日時：平成24年7月30日（月）

午後7時00分～9時10分

開催場所：匠瑳市役所議会棟第3委員会室

出席委員：（学識経験者）鎌田元弘、木村乃、渡辺新

（団体推薦者）萱森孝雄、越川八代枝、鈴木和彦、橋場永尚

（一般公募者）大塚榮一、岡田陽子、永野亮太、林暁男

（11人／名簿順）

欠席委員：（団体推薦者）安藤建子、宇野充紘、越川竹晴

（一般公募者）八木幸市

（4人／名簿順）

市出席者：（事務局/企画課）小川課長、富井副主査（2人）

1 開 会

2 あいさつ（渡辺委員長）

（省略）

3 議 事

（1）里山・檀林問題について

（2）市街地活性化について

[議長]

本日の議題は二つあります。旧飯高小学校施設については、特別支援学校が来るからといって、里山や檀林の問題がなくなるわけではありません。「里山・檀林ふおーらむ」もやりっぱなしになってしまっているのです、少し具体性を持たせた上で具体的な最終提言につなげたいと思います。もう一つは市街地活性化についてですが、これも商店街復権会議をやっているのです、これについてももう少し具体性を持たせておきたいと思います。

そこで、この二つの課題は、これまでのように月1回の会議で解決できる問題では

ありませんので、例えば、里山・檀林の問題であれば、A委員、B委員、それから農業の問題もあるのでC委員に中心になってもらい、部会のようなものを設置して議論するのはいかがでしょうか。また、商店街でしたら、D委員、E委員、F委員に中心になってもらい、中間報告で作ったまちづくりのしくみや考え方を実際に動かしてみたいかどうか。意識が変わらないとダメだという意見もありますが、何か動いている中で意識も変わってくるものだと思います。実際に動かして、少し具体性を出したところで、政策提言につなげたいと考えています。この提案について、皆さんの意見を伺いたいと思います。A委員、いかがですか。

[A委員]

飯高檀林は面積もそんなに広いわけではないので、扱うこと自体はそんなに大変なことではありません。

[議長]

里山を整備していくとしたら、具体的に何が必要でしょうか。

[A委員]

徐々に進めているのは人工林の管理です。現在、山林の木材はほとんど価値がないので、山の手入れをしない人が増えた結果、山が荒れてきてしまっているのです。最近山百合もほとんど見なくなってしまいました。県の林業組合が「山林を提供してほしい」ということで、提供した山林でボランティア活動をしたい人が無償で清掃をするという事業を開始したみたいです。県内でもすでにやっているところはあって、ちょっと体験してみたいという人にはちょうどいい事業かもしれません。要するに、山林をきれいにする人がいないということが課題です。

[議長]

野栄地区にある海岸の砂防林は少し共有地が残っていたと思いますが、山林は全て私有地ですね。地主の方の考え方はいかがですか。

[A委員]

地域で「任せる」という了解をもらわない限りは、勝手にはできません。ただ、地元の人に関わってやる場合には、問題ないと思います。

[G委員]

里山で何か特産品みたいなものはできませんか。例えば、長野県の南の方では、昔松茸がよく採れました。若い人が少なくなって山が荒れてしまっただけからは全然採れなくなってしまって、これではダメだということでまた山を整備し始めたら、また松茸が採れるようになったということです。要するに、松茸を作るためには、山を整備しなければならないということで、時々テレビでも取り上げられています。初茸なんて

いかがでしょうか。

[A委員]

初茸は松が植わらないとダメです。私が学生の頃は採れましたが、まだその頃は山に松がありました。

[G委員]

かつては海岸近くで初茸が採れて、地元の人たちが喜んでいました。それが徐々に採れなくなっているということですから、里山を利用して、例えば椎茸を作ったりはできないのでしょうか。

[A委員]

私もたまに松は植えますが、ある程度の大きさになると虫が入ってダメになってしまいます。よほど手入れをしっかりとしないと、維持していくのは難しいです。椎茸は可能性があって、現在、私たちが考えているのは、空いている畑でコナラやエノキを植えて、それを原木にして椎茸を採ろうということです。

[G委員]

ただきれいにすることだけだと、インパクトや吸引力が少ないかもしれませんが、自分で植えて自分で収穫したものを食べられるというのは、一つの魅力になると思います。

[議長]

環境問題で里山保全というのはよくある話なのですが、それだけだとうまくいきません。特産品や何らかの価値を生み出さないとなかなか前には進みません。

[A委員]

やはりお金につながらないと、なかなか受け入れられません。そこそこの収入につながれば、黙っていても仲間は集まってきます。

[G委員]

四国の方で、高齢者が葉っぱを採ってビジネスにしている例がありますよね。

[A委員]

それは農協などが仕込んだものであって、そういうことを仕掛ける人がいないとなかなかできません。

[H委員]

先ほどボランティアの話も出ましたが、ボランティアを使って里山を整備するだけでは継続が難しいと思います。里山を整備することで何かに利用できるという目的があって、そのために整備していくという方法でないと難しいと思います。以前住んでいた横浜市に市民の森があって、中には個人所有の森が集まっているところもあり、

散歩道を造ったりマウンテンバイクのコースになっていたり、利用ができたり利益が得られるしくみになっています。そういうことをしていかないと、ただボランティアだけで整備していくのは難しいと思います。

[議長]

匝瑳市には川がありませんが、自然を生かした何らかのエネルギー、例えば復興地域では川を利用した小さな発電機をあちこちにつけて農村発電を行っています。地元では難しいかもしれませんがバイオマスなどもありますし、地元や外から新しい視点が生まれるかもしれません。I委員、いかがですか。

[I委員]

先ほどH委員が言われたことは大事だと思います。ところで、文化と文化財の違いは皆さんわかりますか。例えば、お地蔵さんがいたり、ほこらやお寺があつたりすると、私たちは何となく立ち止まってお辞儀を試みたり、手を合わせたりします。これは文化です。美術館で法隆寺の仏像が展示されているとした場合、そこでお辞儀をしたり手を合わせたりする人はいませんよね。これが文化財です。これらは文化に対する姿勢と文化財に対する姿勢が如実に表れている現象です。文化は自然と行動してしまうことなのですが、文化財に対する思い入れは全くありません。ただし、信仰ないしは畏敬があれば、自然と体は動くと思います。そういう意味では、里山や檀林の清掃ボランティアを募ることについては無理があると思います。なぜなら、もはや文化財になってしまっているからです。その文化財に特に関心があるわけではない人に「何とかしろ」と言っても無理があります。好きでもない仏像展に無理やり連れていかれるようなものです。これは、もはや文化がなくなっていると考えべきです。もう一つ言えることは、例えば、ご飯を食べるときに「いただきます」というのは普通の習慣ですよ。そういう風景を写真で撮影され、解説つきで博物館などに掲示されていたとします。これは非常に悲しい出来事ですが、つまり、最近はいさつをしなくなったということになりますよね。里山や檀林はそういう状態にあるのだと思います。生活の中にそれらを共有していないので、もはや文化財になってしまっていて、文化財保護運動になってしまうのです。本当に何とかしたいと思ったら、文化に取り戻していかなければなりません。先ほどのG委員やH委員の意見は、文化に取り戻すということですよ。とにかく、文化として里山や檀林に包み込まれた生活を取り戻すというアプローチをしないと、長続きはしないし人も変わらないと思います。暖房は必ず薪ストーブを使用したり、蚕を飼うなど、そういう生活を取り戻してやっけない限り、維持していくのは困難だと思います。純粋な天然林は別ですが、人間が使っていないと崩れていくものですから、自然なかたちで使っていくという生活を取

り戻さない限り、無理やり保護・管理しても続かないと思います。

[A委員]

飯高で生活していると、周辺にある里山は邪魔物です。自分たちの収入は他の場所で稼いでいるし、わざわざ休日まで山の整備に行きたくないの、だったら無くなってしまった方がいいと思っている人が多いと思います。国が買ってくれたらいいのにと冗談で話したこともあります。

[I委員]

先ほどH委員がおっしゃっていた市民の森は、市が借地して市民の森として使っています。A委員がおっしゃるように、政策として緑と緑のある暮らしを再生していかなければならないと考えるならば、例えば、横浜市では緑税というものを導入し、それを財源として、政策で市民の森を増やすために市で買収をかけています。他にもボランティアの養成講座や年中行事、野菜や花などを作ったりいろいろやっています。そういうことをしなければ、継続は難しいと思います。

[議長]

J委員、いかがですか。

[J委員]

これまでもあったように、特別支援学校については急に出てきた話ですが、いつまでもその状態にしておくのではなく、I委員の話ではないですが、特別支援学校を文化財にしないで、文化に引き込んでいくための方策を考えるべきだと思います。その上で、特徴をどう生かすか、どう循環させていくか、そういうことに絞っていくと、比較的差別化ができると思います。特別支援学校の中身はわかりませんが、生徒や保護者、教師が里山に入ってくるということが、里山を管理する時間的ペースや空間的な特徴、そこにいる生き物、植物、農作業などのスケールと合いそうな気がします。これまでの文化は飯高という狭いエリアで作ろうとしています、それはなかなか難しいと思います。新しいものが入ってきたときに、新しい文化をどう構築していくかが問われていると思います。

[I委員]

福岡県にある「柳川の掘割」というのはご存知ですか。市街と水路がへだてなく隣接し、水路が人々の暮らしに溶け込んでいる場所です。しかし、戦後しばらくすると生活排水の流れ込みなどにより掘割の荒廃が進み、掘割は一転して生活環境を阻害するようになりました。当時の市の下水道担当係長が、公務員としてはよくない行動ですが、市長に反旗を翻し、頑張ってきた環境を取り戻しました。このまちは家の勝手口が掘に面していて、そこから自転車や冷蔵庫など家電製品が放り込まれていて、

悪臭はするし、水は汚くなってしまってひどい状態になっていたのです。そこで、当時の市長の政策としては「コンクリートで全て埋めてしまおう」ということで、それが市民の支持を得ていたわけです。しかし、当時の担当係長は「ここで体を洗い、洗濯し、泳いで遊んでいた生活を取り戻さなければならない」という思いで活動し、現在はきれいな環境を取り戻し、観光地にもなっています。要するに、戦いですよね。先ほど萱森委員が「里山は邪魔物になっている」とおっしゃっていましたが、そういう人に「戦え」とまでは言えません。

[議長]

邪魔だと思っている里山に、バイオマスやチップなど何か生み出すことはできないでしょうか。

[A委員]

そういう人が現ればいいですよ。地元の人には邪魔だと思っているわけですから、自分でそういうことをやろうとは思いません。一番お金のかからない方法は放置することです。

[I委員]

バイオマスも資源循環型のエネルギーなので良いと言われていています。発酵させてもチップ化させてもいいのですが、そのチップ化したものを使う施設をつくらなければなりません。投資して導入するわけですから、皆さん抵抗します。メタン発酵させたガラを堆肥として使おうとすると、昔は糞尿を堆肥として使っていたにもかかわらず、農家は嫌がります。農協から購入する肥料の方が使い慣れているので、そちらを使用したがりません。説得して使ってもらうには、やはり戦うしかありません。

[議長]

I委員が言っていた循環というのが一つのポイントで、かつては里山や集落、農業と生活が全て循環していました。その循環が違う方向に向かってしまっているのです。それをもう一度違うかたちで取り戻せないかと思っています。バイオマスだけでなく、抵抗が大きいかもしれませんが、堆肥センターみたいなものをつくり、循環型の有機農業などを目指すことはできないでしょうか。旧干潟町でわらを使った取り組みがありましたよね。

[A委員]

現在一番困っているのは畜産農家です。そこで出るものを全て畑に流用して野菜を作っていますが、早くできるのはいいのですが、みんな捨ててしまいました。急に育ってしまったものというのは、あまりおいしくないのかもしれませんが。知りあいに聞いてみると、それは野菜農家を作っているのではなく畜産農家を作っているものだと

いうことで、処理の問題でそうしているそうです。

[議長]

昔から匠瑳地域は水田、畑作、植木、畜産が多い地域ですが、それぞれの活動がバラバラですよね。これを何とか循環させるしくみが作れないかと思っています。

[A委員]

昔は親も豚を飼っていましたが、先行して自分もやろうかと思いましたが、結局規模が大きなところにつぶされて、現在の状態になっています。養豚も100頭単位ではなく、1,000頭単位の世界です。昨年、地元の山を造成して、そこに鶏が250万羽来るという話があって地元で大反対したわけですが、今度は300万羽来るという話が来て、大騒ぎしています。事業の規模が全く違います。

[議長]

野栄地区でも養鶏場を大きくやっている人がいますが、愛知県などと比べてしまうと規模が全く違います。

[A委員]

養豚もこの辺では干潟地域の規模が大きく、匠瑳市で飼っているのはおまけぐらいのものです。匠瑳市でも牛を大きくやっているところはあると思いますが。

[I委員]

木質ペレットというのがありますよね。使い道がなかった間伐材やかんな屑などを加工して作った小粒の固形燃料で、これもバイオマスの一種だと言われていますが、これもよく考えると間伐材の正しい使い方を放棄して現れた技術に過ぎません。循環を維持して、それを技術でクリアしようという一種の敗北と同じですよ。もともと間伐材を生活の中で利用することを考えなければいけないところで、結局使い道がないから燃料として使うという選択をしたわけです。そこに逃げ込んでいいのでしょうかという議論です。

[A委員]

間伐材というのはある意味計画的なものです。密集状態にさせて、そこからまっすぐな木を取ろうとするために、間引きしていくのはあたりまえの話です。それを言うなら、始めからスペースを広げて植えれば間伐材が出ることはありませんが、時間がかかります。もともと計画的に出る間伐材ですから、これがお金にならなくてもいいという考えはあると思います。

[議長]

K委員やD委員は、街中から山を見てどう思いますか。

[K委員]

私の息子が働いている会社では、昨年の年商が40億円、今年は60億円になるそうで、先日テレビで放映されていました。その社長の考え方が反映されて、牛や豚、鶏などの糞尿を乾燥させて、そこにレストランで出る残飯を混ぜて肥やしを作る工場が旧山田町あたりにあるそうです。その肥やしを使って作った野菜を、またレストランで買ってもらい循環させているそうです。みんなで農業をやっていこうという考え方は、若い人の間では増えているようですが、昔から農業に取り組んでいる人たちは、農業に対して一生懸命取り組むような気風が少なくなっているのかもしれませんが。私は海外産の安いものより、多少高くても安心・安全な国産のものを選んで買うようにしていますが、やはり値段を見て買う人も多いと思います。私は、もっと日本の農家を応援したいと思っていますのですが。

[A委員]

先ほどK委員が言っていたのは、香取市にある和郷園のことだと思いますが、方法としては生産農家を加入させて、手数料をとって出荷をする会社です。社長の木内さんの講演を聞いたことがあります。最初はそれほどでもなかったみたいですが、ヤマトイモとゴボウの加工品で一気に伸びていきました。今度は生産者を集めて出荷に力を入れて、現在はフィリピンあたりでバナナを作っているそうです。

[議長]

D委員いかがですか。

[D委員]

半年前にあった話なのですが、飯高に1,000坪の土地を持っている人がいて、その人はトラック運送会社の社長で、主に乳製品を運んでいる会社の社長です。バブルの頃に土地を買ってくれという話があって、それ以来お会いしていませんでしたが、久しぶりに電話がありまして、「もう2,000坪買って3,000坪の土地が欲しい」ということでした。何をするのかと聞いたら、野菜工場をやるということでした。運送業の取引もこれからは減少傾向だし、自分も会社の会長になるということで、後に残せるものを考えたら「これからは農業だ」ということでした。今回話があって、私も周辺の農家の方にあたってみたところ、やはり農家の方が自分の土地を手放すということには抵抗があったようで、土地を購入することはできませんでした。社長は、これからの自分に残されたものは農業しかないということで、例えば、和民という居酒屋チェーン店を経営している会社も農業を含めて幅広く事業展開をしています。農業にも企業が参入してくる時代で、先ほどの和郷園も農協をまったく通しません。私も本で読んだことがあります。社長の親が「その方法（自分たちで販路を確保していくこと）はやめてくれ」と泣いて頼まれたそうですが、野菜畑で食べていくためには、農

協を通さず自分たちで直接売っていくしかないと考えていたそうです。現在では、すでに年商も数十億円で、仲間も20人近くいるそうです。中には1億円近く売り上げる生産者もいるようで、農業にも非常に先進的にやっている人がいるということです。

[議長]

東京駅の丸ビルの中で野菜を作っているぐらいですから、法人が農業に参入してくるのは当然の流れなのかもしれません。A委員、道の駅や直売所などもそうですが、農協などの出荷団体を經由せずに市場外へ流通させることは、生産者にとってありがたいことなんですよ。

[A委員]

ありがたいことですが、それをできる人はほとんどいません。農協ではありませんが、生協の組織と契約して、生産者が生きているというのが現状です。自分では値段が決められないし、肥料は指定のものを使わされたりと、一定の制約を受けながらよりいいものを生産するだけで手一杯です。

[議長]

生鮮食品は作った人が値段を決められません。

[K委員]

作った人が値段を決める市場がありましたよね。

[A委員]

私もふれあいパークに3年半いましたが、1反歩で10品作ればそれなりにいいですが、1反歩で1品作って全て売ろうとしたら、ふれあいパークでは売れません。ふれあいパークにハウレンソウを10箱置いてもそんなには売れません。お店を5～6軒抱えていても同じことで、販売量より生産量の方が超えてしまいますので、生産したものをまるごと販売できる農協を通す以外、飯を食っていく方法がないというのが現状です。

[I委員]

直売所なら生産者が価格を決められるというのは幻想です。直売所におけるデフレというのはすさまじいもので、価格形成はできるが価格コントロールができません。農協はとりすぎですが、結果的に大型流通に任せておく方が安定するわけです。最近、直売所が多くできてきて、農家もそこで経験し、わかってきたことです。家庭菜園で作ったものを売る程度なら問題ありませんが、農家はそうはいきません。

[議長]

市場原理が働いてしまうので、卸売市場で決まる価格がベースになってしまい、そこから大きく外れることはできません。

[A委員]

飯高のような農村地帯で、農家がこのままでいられる状況というのはかなり難しく、農業だけを考えると1割の人がいればいいということになっています。そうすると、隣近所の人がみんないなくなってしまうことと同じですから、それは避けたいと思っています。お金も何も無いけれど、飯高は良いところだとみんなが共通の思いでいてくれたらいいですが、そうはいきません。先ほどD委員の話にもありましたが、大きな企業が参入してきてその下請けに入り、やはり利益が出ないからやめようとか、土地が売れたから良かったとか、そういうふうには地元の人には考えられないと思います。

[議長]

そこで、何か飯高発の新しい農業の形態を始められませんか。

[A委員]

先ほどの話にもありましたが、本当に田舎を演じる暮らしができるかどうかだと思います。そんなことができる人はどれだけいるのでしょうか。

[K委員]

以前、飯高檀林の水が良い水だという話がありましたよね。長生きする水だから、それを売り出そうとしたという話を聞いたことがあります。水を売ってみたいかがですか。

[A委員]

いい水だという人もいますが、私が聞いている話では、畜産でいろいろな畑を使っていて、その影響でかなり窒素分が多く、井戸水に影響を与えているということです。

ただ、売り出すにしても、本当においしい水というのは、山に降った水が深さ10mぐらいから出ている湧き水で、50mも掘るとほとんど他のものと変わりませんので、現在、販売されているような有名な水と同じ量を確保することはできません。

[議長]

農業は価格と合理化の問題だけでいくと、匝瑳市域では区画整理が必要になってきますが、それは難しいと思います。区画整理をして土地を集約していかないと、機械化や効率化はできません。集落農業を確立していくことになると、やはり循環型の農業などを考えていく必要があります。

[A委員]

匝瑳市ではお米を中心に頑張ってきてしまったので、現在はどん底です。旭は施設園芸がほとんどで、後継者もちゃんといます。銚子は、メロン、ダイコン、キャベツの3本立てで、かなりの結果を出しています。

[議長]

本日、L委員が出席であれば聞こうと思っていたのですが、畜産の飼料はどこから仕入れているのでしょうか。

[A委員]

ほとんど海外からの輸入だと思います。

[議長]

結局、輸入しているので肉骨粉やBSEの問題が起きるわけです。

[A委員]

現在、飯高で一生懸命農地を守って頑張っている仲間は、日本はこのままではいけないという考えで、車で有名な会社であるトヨタがどんなに頑張っても、日本に食糧を持ってくることはできない時代が必ず来ると思って、ひたすら頑張っているだけです。不幸な話ですが、農家が生きられるというのは、皆さんが困ったときなのです。

[議長]

里山でのバイオマスや、海岸で獲れる海の幸などが交流できる拠点として、商店街が活用できませんか。D委員いかがですか。

[D委員]

数年前に市内の海水浴場が全て閉鎖されてしまいましたが、その前でしたら何とかあったかもしれません。現在、海岸との接点がなくなってしまいましたし、人もそんなに来なくなってしまいましたよね。

[G委員]

例えば、八日市場という名前があるように8のつく日に市を開いて、商店街を巻き込みながら、JT跡地で昔の市を復活させるようなことはいかがですか。

[D委員]

現在は、年3回ぐらい本町通り商店街を中心に市場まつりなどを行っています。

[議長]

JT跡地については、青年会議所や商工会青年部などで何か考えていませんか。

[F委員]

普段はあまり一緒にやるという機会はありません。それぞれやりたいことがありますので。

[A委員]

現在やっている朝市も厳しいですよ。朝市が終わると全てふれあいパークに物を持って行ってしまうので何とかなっていますが、朝市だけでは売れないと聞いています。

[事務局]

意外と朝市自体の存在を知らない人もいるので、PR方法にも問題があるのかもしれない。

[G委員]

朝市に商店街で出店し、そこで競い合って名物を作るとか、そういう活動ができないのでしょうか。

[A委員]

植木も平木の方で1日と15日に競り市をやっていますが、これもお客さんを見つけるのが大変のようです。まだ花の方が需要はあるかもしれませんが。野菜と園芸が一緒になって市を開くことができれば面白いかもしれませんが、開催するのであれば日を決めてやった方が、お客が定着すると思います。市外から人を呼び込めるようなものを考えないと続かないと思います。

[I委員]

ちゃぶ台をひっくり返すような話ですが、結局他人ごとの議論しかできないのです。JT跡地については、実感がないかもしれませんが実害は発生していますので、何かを発想するときには他人ごとになってしまいますが、自分も負担させられているという視点では他人ごとにはなりません。では、里山が荒れて雑草が生い茂っているという状態になったとして、果たして誰が困っているのでしょうか。困っていないのに、なぜそれを何とかしなくてはいけないという必然性があるのでしょうか。皆さんは、そんなに地球環境問題に関心がありますか。商店街についても同様で、店主ではなく、その周りの人間が活性化したいと思うのはなぜでしょうか。何となくにぎやかであってほしいのでしょうか。そこが共有できていないと、なかなか前には進めません。先ほどの8のつく日に市を開く計画についても、発想は素晴らしいと思いますが、無理やりやったところでまちが活性化することはありません。何とか努力して継続することが手一杯の状態ではやる意味がないし、8の日に市がないと居ても立ってもいられないという状態にならないと続かないと思います。

[J委員]

中間報告で提案したことと、本日の議事はどういう関係にあるのでしょうか。議論がバックしているような気がします。アイデア出しであれば、これまでもいくつか出ているのであって、中間報告では「伝道師が誰か」というような話をしています。本日の議論で求めているものは、いったいどんなことなのでしょう。

[議長]

本日、本当に議論したかったことは、もっと構造的なものなのです。伝道師や中間

支援組織を作って、市民協働などでやるのはいいのですが、現在の状況を作り出している構造的な部分を変えていけるような作り方をすべきだと思います。おそらく市民協働でやったときには人が集まるとは思います、やったときだけ人が集まっている状態では、結局元に戻ってしまうと思います。人が集まって何かをやる際の方向性を、この地域の構造の中から解き明かしていかないと、まちづくりの方向性が見えないのではないのでしょうか。全国で市民協働は流行ですが、上手くいっているところと上辺だけのところと、私にはいろいろと見えてしまいます。先ほどの商店街に即して言うと、現在残っている商店は、伝統があって独自のものを作り出しているところですよ。最近、お店がなくなっているようなところは比較的新しいお店だと思いますが、F委員いかがですか。

[F委員]

閉店してしまったお店は、代わりがあるお店ですよ。大型店に行けば用が済んでしまうようなお店から打撃を受けていきます。

[J委員]

構造的にとらえてそれが解決するのであれば、これまでの我が国の政策でほとんど解決していますよね。

[議長]

構造的なものをとらえた上で、今回提示する中間報告のような方法論を組み合わせていくことになると思います。

[J委員]

多くの構造はもう明らかになっているのではないのでしょうか。この地域での特殊な構造を探そうということでしょうか。

[議長]

一般的な構造と特殊な構造の両方です。

[J委員]

先ほどから、一般的な構造に近い話を多くしていますよね。

[議長]

例えば、農業の問題はおそらく全国共通だと思います。先ほどまでの議論は、実はそれ以外の地域で行っている独自の集落農業などを導き出そうとしていたわけです。

[J委員]

集落農業もだいぶ前から議論がありますよね。

[議長]

集落農業をやりながら、匠瑛市独自のもの、先ほどは例としてバイオマスを挙げま

したが、これまでやっていないようなことを導き出せないかと思っていました。

[J 委員]

エネルギー政策も各地で行っていて、すでに一般化されていますよね。

[議長]

一般化されていますが、それでも使えるものは使っていければと思います。

[J 委員]

本日の議論は、そういう情報を集めようとしているのですか。それとも共有しようとしているのですか。

[議長]

情報というよりも、構造とそれを解明すること、そしてそこに何か新しいものを作っていくことをワンセットで考えています。

[I 委員]

例えば、檀林はもともと僧侶の学校ですよね。現在、勉強できるスペースというのはあるのでしょうか。

[A 委員]

講堂がありますので、大体 400 人ぐらい入るスペースはあります。

[I 委員]

「戦略会議は毎回檀林で行う」、まずこういうことから始めることが第一歩だと思います。

[A 委員]

蚊に刺されて大変だと思います。

[I 委員]

ポイントはそこです。蚊に刺されて大変なので、快適に議論ができるように自分たちで智慧を出して蚊帳を作ってみるとか、こういうことが自分で何かをすることだと思います。せめて問題意識を共有できていないまでも、無理やりでもいいから何かをすることができる集団として、戦略会議はすごく価値のある集団だと思います。問題意識を持っているが、正直言ってまだ他人ごとの状態でもかまわないので、とにかく檀林で会議を開催することからスタートさせてみましょう。今日は会議半分で、残りは遊びにしてみようとか、では何をして遊ぶことができるのかと考えて、そこに子どもたちを呼んでみようとか、ゲストを呼んで勉強してみようとか、行動しているうちにいろいろな人が集まってくると思います。そうなると、草も刈らなければいけないというように、構造というのはそういう行動原理を作り出すという意味で構造だと思います。

[I 委員]

委員長がおっしゃるように動いていく中で意識を変えていく、これはそのとおりだと思います。いろいろ図を描いた上ではなくて、もはや構造はあてにならない部分があるので、まずは動き出してみた中で自分なりに構造を理解してみたいかがでしようか。もしかしたら、構造という考え方自体がすでに構造化されてしまっているのかもしれない。何かしらの動きの中から考えてみるのがスタートだと思います。

[議長]

以前、A委員がふれあいパークの話をしたとき、食の安全について語っていました。ふれあいパークのような直売所をつくって、運営者側から食の安全について厳しく指導したところ、生産者の意識や生産方法が変わったということでしたよね。このように、生産現場まで効果を与えるようなまちづくりのしくみを作らないとまずいと思います。私も今回の中間報告を作ってみて、J委員やI委員の考え方は大変勉強になりました。こういうシステムを作っていくことは、この匝瑳市においては必要だと思いますが、このシステムを使ってまちづくりを進めていくと、何かしらの構造変化が起こってくると思います。その構造変化を起こすときに、どういう構造変化を求めるのかを考えておかないと怖い部分があります。

[J 委員]

そういう前提がすでに構造的なのではないでしょうか。怖いかもしれませんが、もう少しトライ&エラーを繰り返して、意識改革をしていくという第一歩をみんなで共有していこうということではないのでしょうか。あんまり事前に想定してしまうと何も動けなくなってしまいますし、先ほどの生産者の意識を変えさせたというのも、構造を理解した上でやったという人はそんなに多くありませんよね。後で構造化したという事例は多くありますが。

[議長]

後で構造化していきますが、それが我々人間の考える力だと思います。

[J 委員]

動きが出る前に疲れてしまいませんか。エネルギーになる前に、難しい内容であれば動きがなくなってしまうこともあり得るので、協働でトライアルを続けることでエネルギーを止めないことが重要です。

[議長]

構造的で疲れてしまう、まさにそのとおりだと思います。私の考えは会議で全面的に出したのではなく、構造という言葉もあまり使いたくはありませんでしたが、私の頭の中で考えていたことなので、それが中間報告で積み上げてきたものと比べて議

論が後退しているのではないかと問われれば、そのとおりかもしれません。

[I 委員]

というよりも、構造的にとらえるべき問題は存在しないのではないのでしょうか。なぜなら、誰も困っていないからです。付加価値をつけようとするから、こういうことが話題になるのですが、現状において窮することなく暮らせる豊かさを享受しているのが、匝瑳市なのです。

[議長]

実際は困っていると思いますが、それを困っていると意識させないような構造なのです。

[I 委員]

将来を構想したときに、不安がよぎるということではあるかもしれませんが、それは構想力のある人にはそういう判断ができるかもしれませんが、それはごく一部の人の感覚だと思います。社会を導いていく伝道師というような役割の人が構想力を持ってやっていくことになりますが、それは行動のきっかけではなく行動を促す役割であって、きっかけを作っていくのは庶民たる人民でしかありません。人民の感覚で考えると、J T跡地は解決しなければならない問題ですが、里山は解決しなければいけない問題という構造状況にないのだと思いますが。

[議長]

すぐに解決しなければ暮らしていけないという問題ではありませんが、生活だけではなく、そこに自然や環境という概念でとらえると、それは一つの問題ではあります。

[I 委員]

あえて言うならば、それはイデオロギーですよ。

[議長]

そうかもしれません。私は自然や環境は大事だと考えていますので、それが人と自然との関わりの問題だと思っています。

[I 委員]

私は内容に異議があって言っているわけではありませんが、J委員はイデオロギーを前提とする構造化に対して否定的な見解なのではないのでしょうか。やってみなければわからないということがわかってしまったということが、J委員のおっしゃることだと思います。環境問題と言いますが、本当に環境問題は大事なことなのでしょうか。大事と言われているから大事なような気がしているだけではないのでしょうか。二酸化炭素が影響して温暖化が進んでいると言われているのですが、本当にそうなっているかどうかはわかりませんよね。

[議長]

例えば、里山が荒れたという実態はありますよね。これは、自然と人間の関わり方が変わってしまったということです。結果として、自然が変化してしまったわけですが、自然との関わり方を考えていくこと、つまり、自然とどう関わっていったらいいのかを考えることは重要だと思います。

[I 委員]

これは社会学でいう共同体理論のような話で、「田舎は村社会で恥ずべきことなので都会化しよう」ということを 1960 年代～70 年代ですっとやってきたわけです。この流れは事実なので、みんながそう思っていたと言っても過言ではありません。環境問題に警鐘を鳴らすというのは、これと同じことだと思います。現在は、都会化を進めることに反省している部分がありますが、当時はそれが正しいことだと信じていたのです。これと同様に、いま環境というテーマを危機的状況にあると信じて、何とかしなければいけないと思ってやっていることは、信じてやっていることなのです。あえて言えば、それはイデオロギーではないかと思っているのですが。

[議長]

戦後、都市化の一番の象徴は東京ですよね。これが今年の東日本大震災を経て、もろくも壊れたわけです。電気のある生活が当たり前だったわけですが、計画停電などで都市の生活が混乱に陥るわけです。先ほど I 委員がおっしゃったように、高度経済成長期を通じてやってきた国土開発そのもののあり方が問われているわけです。それは自然を大事にするという問題だけではなく、開発行政や国土形成のあり方をもう一度作り直さなければならない、そういうところまで迫られていると思います。原子力も里山もそうですが、人が自然の中で社会を作っている以上、自然との関わり方は重要だと思います。特に、今までの農業や生活の構造が変わる中で、里山と人間と地域社会の関わり方が変化したことで里山が荒れてしまったので、そこを考えていきたいと思っています。

[I 委員]

私は内容的に異論はありません。内容に異論がないというのは、社会評論という立場で考えれば、私も同じように思っているからです。ただ、里山問題は自分ごと問題として如実に実感させるという状況が自分にはありません。委員の皆さんが、自分の生活や生業、周囲の状況からそのことを如実に実感していて、解決していかなければならない問題として意識が共有されていれば、この議論は多少なりとも意味があると思いますが、皆さんいかがですか。もし、これがわからないということであれば、とりあえず一步を踏み出して歩いてみることから始めてみてはいかがでしょうか。

[J 委員]

どうしても構造的に考えると正解が一つとか、正解があるという前提になると思いますが、特殊な構造をとらえようとしているわけですよね。ですが、どうしても一般的な構造に近い話をされているように聞こえてしまいます。協働批判的におっしゃいましたが、そうではなくて、失敗するか成功するかはわかりませんが、協働の取り組みがあるからこそ、いろいろな動きが出てくるのだと思いますし、I委員の言うような動きもそういう脈絡の中であるものだと思います。地域構造を安定的にとらえようという考え方自体が不安定であるということが、東日本大震災の後にわかってきたわけですね。

[議長]

不安定というのは、これまでやってきたことがもろくも崩れたからです。ただし、不安定なままでいいのかというと、それはアナーキー（無統治状態）です。人はそこに何かを求めようとするのではないのでしょうか。

[J 委員]

不安定＝アナーキーとは限りません。不安定なまま、変化のパターンが身につけてもいいわけですよね。「津波が来たら逃げろ」というのは不安定ですが、答えでもあります。

[議長]

ただ、そういう考えが全ての人に行き渡っているのでしょうか。

[J 委員]

それを全ての人に求めるかどうかは、安定を求めようとしていることです。

[議長]

安定はなかなか求めることはできません。求められませんが、何らかの新しい枠組みのパラダイム（規範）を、私たちは考え出そうとするのではないのでしょうか。

[J 委員]

それが自分ごとでないとパッション（情熱）につながりませんよね。新しい枠組みを求めようとして、そうではない構造をいくら周りにいる人に伝えようと思っても疲れてしまいませんか。

[議長]

疲れてしまいますが、私は自分ごとと他人ごとというのはワンセットだと思っています。自分ごとだけでやっていくと、非常に近視眼的になる傾向があるような気がします。

[J 委員]

それは構造的に見るからではないでしょうか。

[議長]

自分ごととして地域づくりはやらなければいけません、そこには他人ごとの議論も必要なのだと思います。

[I 委員]

どちらの考えもあると思います。社会が変わるときに、きちんと整理をされた問題のとらえ方と将来の構想を立ててリーダーシップを発揮して連れて行ってくれる人が出現するというのを望むという気持ちは、当然我々にあります。そのリーダーシップに引っ張っていかれることで豊かな社会を享受できるというスタンスは間違っていない。一方、起こっている現象を冷静に見てみると、ゲームメーカーやソーシャルネットワークが社会に変革をもたらしているのも事実で、全く無計画に発生していた事象（カオス）が増えている世の中です。いつの間にかそれが大きな流れを作ってしまうのですが、これが世の中を作り上げていくきっかけになっているというのも事実です。他人ごと自分ごとがワンセットであるとも言えますが、当然ながら他人ごとで動いていく世の中もあるということです。社会システムは存在するわけですから、それを全て自分ごとで考えていたら成立しません。例えば、インテリがインテリのことだけ考えてはダメで、農業のことも考えていかなければ農業もうまくいきません。一方で、一部の農家がやり始めたことが、飛躍的に農業に変革をもたらしてしまうこともありえます。この両方が前提であると考えたときに、戦略会議では社会システムを論じることは不可能なのではないかと思いましたが、私がこだわっているのはその部分なのです。戦略会議では、近視眼的になってもよいという一種の割り切りをして、己の領域で大事な部分だけをやっていけばいいのではないかと思います。決して構造的に物事をとらえる必要がないということではなくて、この場での議論の仕方とこれまでの行動の仕方は、極めて人間サイズで考えられる範囲でやっていくということこそ、意味があるのだと思います。

[議長]

いつも I 委員の話の話を聞いていると自分ごとの議論をされますが、物事のメカニズムを考えて、ある意味構造的な部分が見え隠れしているような気がします。

[I 委員]

私に関して言えば、匝瑳市の出身ではありませんので、全て他人ごとの議論です。

[議長]

この話はこれ以上やってもしょうがないので先に進みます。

さて、里山の問題と商店街の問題ですが、どうしましょうか。

[M委員]

自分ごとで考えると、私は高齢者や障害者の対応をしていますが、まだまだ非常に動ける要支援という方が行き場に困って何となくデイサービスに来て、お茶を飲んで帰っていきます。これは何もしていないことと同じなので、それを続けていくと徐々に体の機能が低下していき、最終的には寝たきりになってしまいます。制度的に難しいのですが、そういう人たちに農作業をしてもらったり働く場を創っていくなど、外に出て動いてもらうことによって、元気になれる人が多く存在するのではないかというのが私の実感です。ただ、それを実行するためには交通手段がないという問題がありますが、飯高地区と何かうまくリンクさせることができたらいいなと思っています。

[議長]

里山と檀林のことを考えるときに、ぜひそういう内容を組み込んでいきたいと思えます。具体化し、動きも作っていく中で提言につなげていくという、この方向性についてはいかがですか。当初は、中間報告の延長線上でもう少しまちづくりのあり方を匝瑳市に即してやっていこうかと思っていたのですが、どうしても里山・檀林と商店街のことが気になりまして、こういう提案になったわけですがいかがですか。

[K委員]

8月に公民館で観光協会主催の写真展があります。そこに、私の撮影した飯高檀林の写真が飾ってありますが、匝瑳市ではたまに観光展などもやっています。祭りともなると人がたくさん集まります。楽しいことがあれば、人は自然と集まります。商店街を歩いてみると、肉屋さんはいくつもあります、八百屋さんはほとんどありません。呉服屋さんは入りづらいですが、洋服屋さんは少しありますので、私はなるべく商店街で買うようにしています。戦略会議に参加するようになってからは、買物は商店街でして、病院は市民病院に通って応援しています。しかし、商店街には洋服屋さんが少なく、あってもファッションモデルが着るようなものしか置いていません。買物をするにも座る場所がないので、とても疲れてしまいます。高齢者が買物に行く場合には座ってゆっくり考えてからしますので、そういう対応をしっかり考えないとお客はどんどん離れていってしまいます。

[J委員]

例えば、K委員のような主婦の評価集団を作るとか、M委員が福祉と活性化の領域を作らないで高齢者が働けるような商店街を作るなど、この二つも自分ごとですよ。こういう観点こそ重要にしたいと思えます。そういうアプローチをしていけば、中間報告から一歩先に進むのではないのでしょうか。

[A委員]

高齢者のまちなので、高齢者に来てもらうのではなく、高齢者に出向いて商売をすればいいと思います。発想が逆ですよ。

[K委員]

私もそう思いましたので、市の商工会に宅配システムを作ってくれないかとお願ひしたのですが、受け入れてもらえませんでした。

[A委員]

私はふれあいパークにいるころから、いずれはそういう時代になるということを書いてきました。

[I委員]

提案しづらい提案をします。なぜなら、日中の活動があるので自分が関わる可能性がほとんどないからです。戦略会議は、中間報告をきっかけに行動する会議へと変貌を遂げ、行動する会議という性格づけで、これまで出てきた意見を実際にやってみるのです。例えば、M委員の職場を訪問し、みんなで高齢者を飯高檀林に連れていったり、K委員と一緒に商店街チェックをして、言いたいことを書いてみるとか、そういう行動する会議にしていったらどうかという提案です。それについて、皆さんの意見を伺いたいと思います。

[議長]

私も同じ考えです。会議の冒頭で部会の設置を提案しましたが、狙いはまさにそういうところにありますので、私は賛成です。ただし、I委員が言うように負担が増えることにもなりますので、皆さんの意見を伺います。

[J委員]

私も行動することに賛成です。これを市民全体に広げていかなければいけないわけですが、しくみとしては市民提案事業など、いろいろメニューはあるわけです。そういう提案事業のあり方を提案し、市民から提案を受けて1年～3年ぐらいのスパンで良いものを探してみるという、提案のあり方の提案を含めてやっていけばいいのではないのでしょうか。当初目指していた市民協働のしくみを導入したいと言っていたのは、こういうことなのです。

[議長]

J委員がおっしゃった提案型の市民の活動が、匝瑳市に一番欠けているものだと思っていました。これを何とか実現したいと思い、J委員やI委員が提案する市民協働を議論してきたのは、そこに行き着くためです。そのときに、私の方で構造的な部分を考えていかなければと思っていたので、先ほどの議論をしました。よって、I委員の提案は部会でやってもらいたいことと一致しているわけですがいかがでしょうか。

[E委員]

私はとてもいいことだと思います。先ほどのK委員の話ではないですが、商工会事務局の職員は地元の人ではありませんので、本当の気持ちが伝わらず、他人ごとになってしまうのです。今度は部会を設置するということで、私は普通の会員ですが、今年はD委員が商工会の副会長になってくれましたので、朝市や商工会で行っている取組みも見えてきますし、それぞれの取組みがまとまるように力を発揮してくれると思います。そうなれば、自分ごとでいろいろ考えることはできるかもしれません。

[H委員]

先ほど構造についての話があり、現場を知るということは大事なことだと思いますが、以前から委員長がおっしゃっているように、商店街のデータが全くありませんよね。データがないので行動を起こさなければという発想はいい方向だと思いますが、具体的に行動を起こす際には、良いところより悪いところの方が10倍くらい出てくるわけです。それをフィードバックしていくことから始まると思いますので、そこでは商店街の店主たちと摩擦が起こることもあり得ると思います。そういうことをお互い了承した上で、活性化について議論をするということがスタートになると思います。その土壌作りはしっかりやっておいた方がいいと思います。

[議長]

そのとおりですが、摩擦は前進の原動力になるのでいいことだと思います。そこで、商店街の側でどこから突いていったいいのか考えていました。D委員、多田屋のNさんはいかがですか。研究会みたいなものを作って何かやっていますよね。

[D委員]

Nさんは経営者協会という非常にレベルの高いところでやっています。昔は地元の役員をやっていたのですが、今はそこから離れてしまっているので、情報があまり入ってきません。

[議長]

一店逸品運動というのがあるそうで、以前行った商店街復権会議のときには、ちょうどその会議と重なってしまったようです。そういう動きが商店街にはあるそうなので、そういう人たちと接触を図った方がいいと思います。

[I委員]

よくある方法で、D委員やF委員、E委員など身内に近いところからアプローチしていくやり方がいいのではないのでしょうか。突然殴り込んでいったら、どんなにいい人でも嫌だと思います。

[議長]

結論めいたことを言いますと、先ほどJ委員から市民提案型の事業の話もありましたが、そういうものを利用して商店街のマスタープランを作らせることが、戦略会議の到達点だと思っけていますがいかがですか。

[J委員]

マスタープランというと都市計画用語になりますが、しっかりしたものはできますが、魂が入らず構造的になってしまうのです。マスタープランに魂を入れるような課題解決の目がいくつか出ている方がはるかに重要で、従来の作り方をするとあまり面白みがありませんし、今まで積み上げてきたものがつまらなくなってしまう。成功も失敗も含めて生の情報を載せてあげることが、最終報告にはふさわしいと思います。

[議長]

マスタープランを戦略会議で作るのではなく、行政が支援して市民に作らせようと思っけています。行政と商店主が一緒になって、商店街を活性化させる計画を作ることができればいいのではないのでしょうか。

[I委員]

あえて言えば、行政が作らせるということに関しては、我慢すべきところだと思います。戦略会議でマスタープランは必要であるという認識は持ち続けていいと思いますが、現場の商店主が自らマスタープランを作りたいと言い始めるまで我慢すべきです。そうやって作り始めるものでなければ、マスタープランに魂は入らないと思います。商店主をそういう気分にならせていくことは必要だと思いますが、行政から言い出すと、その瞬間に「作ってもらえる」と思っけてしまっけて、これまで積み上げてきたものが一瞬にして崩れてしまいます。

[議長]

戦略会議の発足当初、匝瑳市の都市計画マスタープランが配付されたと思いますが、作成後どのように使っているのですか。

[J委員]

都市計画マスタープランは、総合計画を受けて20～30年後を見据えて、都市計画法を実現しようという一つのメニューです。それは都市計画法による法定都市計画なので、市民が関わらなくてもやれる部分なのです。これまでの議論は、それでうまくいかないのでしょうかということですよ。

[議長]

結局、作ったけれどもほとんど利用していない状況ですよ。

[事務局]

直接、市民の方が利用する機会というのはあまりないと思います。

[I 委員]

都市計画事業を行うときにはそれが基準となっていますので、県との調整をする際には都市計画マスタープランを携えていないと何もできません。そういう意味では、行政実務として使われることが多いものです。

[議長]

マスタープランという言葉を使わずに、何かいいネーミングはありませんか。

[I 委員]

それは現場にいる商人たちが考えることだと思います。

[K 委員]

商人と言えば、商店街を歩いているときに素敵なブラウスが目についたので、店主に聞いてみたところ、サイズがMということだったので、Lはないかと聞いたところ「ありません」の一言でした。次に別のお店で聞いたところ、やはりLがなかったので取り寄せをお願いしました。1週間後、再度お店に行きましたら、ちゃんと届いていました。私は高齢なので車にひかれないよう派手な服を選んでいますが、お店には地味なものが多く、もっと派手なものを販売すれば高齢者がたくさん買いに来るということを教えてあげました。黙っていたら商店街は発展しませんので、この会議の仲間になった以上、辛口おばさんでいろいろ言うことにしています。

[議長]

これは戦略会議の一つの成果ですね。では、本日議論したような方向で進めていきたいと思います。

さて、商店街の部会ですが、D委員を中心に、F委員、E委員、K委員に検討していただければと思います。里山の部会は、A委員が中心になりますよね。

[I 委員]

異論があるわけではありませんが、その切口を先ほどのM委員の発想などでいく方がスムーズだと思います。里山だから里山を切口に正面突破するよりも、横槍でお年寄りを飯高に連れて行くというような切口の方がスムーズだと思います。ひょっとしたら、それを受け入れていくことで新しい切口が生まれて、地元の人が本気になって動いてくれるかもしれません。

[E 委員]

それは商店街の部会でも同じことが言えると思います。

[J 委員]

先ほど事務局に送迎していただいたときに話していたことですが、行商をやっ

た人が東京に行って海産物以外の日用品も頼まれて販売し、それで日常関係も築くことがあったとすれば、高齢者がビジネスをやれるしくみがあったということですから、行商人の商店街みたいなものができたら素晴らしいと思います。

[I 委員]

これは特殊な構造です。

[J 委員]

ないものより、あるものを光らせていったほうが、当事者たちも合意しやすいと思います。

[I 委員]

里山・檀林部会長にM委員を推薦したいと思います。

[議長]

M委員いかがですか。

[M委員]

やらせていただきます。

[I 委員]

高校生を連れて飯高で何かをやるときにはB委員に中心になってもらうとか、里山はあくまで舞台と考えています。ただし、コーディネーターはA委員にやっていただくことが必要です。

[議長]

一つ気になることは、里山を福祉の目線でやっていくとしても、やはりC委員にも入ってもらい、農業の特徴を活かしてほしいと思います。

[I 委員]

それについても、農業を正面からとらえるのではなく、食の専門家であるH委員に入ってもらい、食のスタイルから議論してもらった方がより刺激的だと思います。

[議長]

最近、大学の講義でも「食料経済学」というように、漢字が「糧」から「料」という字に変わってきています。やはり、食の問題は大事だと思います。では、そういう方向でいきたいと思いますので、御協力をお願いします。それでは、事務局から何か連絡事項はありますか。

(3) その他

[事務局]

3点、事務連絡をさせていただきます。

まず1点目です。次回会議の日程ですが、資料では日時が空欄になっていると思いますが、8月31日（金）に開催したいと思いますのでよろしくお願いします。

次に2点目です。中間報告の確認・提出についてですが、現在、委員長の方で修正作業を進めていただいております。全て修正が終わりましたら、一度委員の皆さんに内容を確認いただき、問題がなければ市長へ提出したいと思います。

最後に、今回の会議録の確認については、順番でF委員、I委員にお願いします。連絡は以上です。

[議長]

D委員、M委員、部会についてはいつから開始しますか。次の会議が8月31日ですが、そこで何か報告できるように始められますか。

[D委員]

この間に祇園祭とお盆がありますので、すぐに動くのは難しいと思います。

[議長]

わかりました。それでは時間になりましたので、本日の会議はこれで終了となります。

[事務局]

ありがとうございました。

4 閉 会